

成熟都市へのアプローチ

—— 京都論序説 ——

谷 口 浩 司 *

今日、都市改良がけっして小さな一方的改革ではないことを、われわれは知りはじめている。なぜなら都市デザインの課題は、今日の文明の再建というもっと広い仕事を包含しているからである。現在いちじるしく大きな役割を演じている寄生的で掠奪的な生活様式を変革しなければならず、地域と地域、大陸と大陸とが仲よく並び、効果的な共生を、互いに協力する生活をつくりださなければならない。問題は、権力への意志や利潤への意志よりもさらに本質的な人間的価値にもとづいて、われわれがこれまで都市建設や政治制度化において誤用してきたか、もしくはけっして合理的に利用しなかった一群の社会機能や社会過程を相互に関連せしめなければならないことである。(L. マンフォード著『都市の文化』より¹⁾)

1. 景観問題から提起されたこと

ポスト・バブルと「建都1200年」

「土地神話」に支えられてきた日本経済は、大きな軌道修正を強いられている。「高度成長」、「オイル・ショック」と2度の転換期をへて戦後50年、「バブル崩壊」によって今また第3の転換期を迎えている。「土地神話」によって裏打ちされた「バブル景気」には、際限のない人間の欲望によって成長しつづける社会像があった。都市は社会の中の社会であり、拡大する人間の欲望を満たす、魅力的な場として発達してきた。しかし、「バブル経済」の破綻によって、私たちは「都市の豊かさ」の見なおしを迫られることになったのである。その都市に暮らすことの本当の豊かさとは何か、そして成

* 佛教大学総合研究所兼担研究員（佛教大学社会学部教授）

1) Munford, L., *The Culture of Cities*, Harcourt Broce Javanovich, Inc., 1970, 生田勉訳『都市の文化』鹿島出版会, 1974年, 9頁。

熟した都市の姿とはどのようなものなのか。こうしたことについて考察することの意義は、時代の転換の中で深まっている²⁾。

私たちのテーマは京都にある。京都は現在、「歴史的景観の保全と経済的再開発」といったアンビバレントな問題に苦しんでいる³⁾。私は、この問題を生活様式の間として機能してきた都市・京都が生産様式の間への機能を高めようとする過程で生じた矛盾であると捉える。いわば社会システムの変化において、新しい状況に即した生活様式のあり方が問題となっており、そのための調整様式の構築が必要であるとの視点に立って問題の整理を試みようとするものである。しかしながら、京都の都市問題を取り上げることの意義は、京都の問題だけに留まてはいない。それは、東京に象徴される日本資本主義の「成功的な」発展の内実を、伝統の解体のいわば象徴として京都にみることなのである。

日本の経済発展があらゆるエネルギーの一極集中的な中央集権都市・東京をつくりあげているが、他方に地方の衰退をもたらしている。京都も構造的にはそうした過程に投げ込まれている。しかし、京都は日本の歴史の中で特別な位置を占めていたために、過去の大きな遺産に依存して、その影響は相対的に緩やかであった。しかし、京都も現在、「一周遅れ」でこうした事態に巻き込まれつつある。「活性化」のスローガンのもとに推し進められている再開発の波は、改めて日本の中で京都とは何かを問っている。

第3の転換期と重なるようにして迎えた1994年、京都は「建都1200年」、歴史の節目であった。個々に行なわれた催の成否はともかくとして、それは全体として見れば、市民的な盛り上がり欠けていたと言わざるをえない。それは何より、そこに掲げられた理念とは裏腹な現実が進行したことによく表れている。伝統を大切にすることに文化人だけが熱心であったわけではない。経済人として異論はない。京都に残されてきた歴史的で伝統的なものは遅れたものであり、消滅の運命にさらされているもの、などとされたわけではけっしてない。「建都1200年」に掲げられたテーマは「伝統と創生」であったし、企画された多くの催は、歴史への誇りとそこからの飛躍であった。しかし、他方でこの1200年の節目に合わせるかのように街並みは大きく変わろうとしているのである。それは、景観問題として立ち表れている⁴⁾。京都ホテルの建て替えや京

2) 佐和隆光『成熟化社会の経済倫理』岩波書店、1993年。

3) 飯田昭・南部孝男『歴史都市京都の保全・再生のために』文理閣、1992年。

片方信也『「景観」くらし息づくまちをつくる』機関誌共同出版、1992年。

4) 飯田昭・南部孝男『前掲書』、片方信也『前掲書』。

都駅ビルの建て替えは、市民的な論争をまきおこしながらも、行政の「後押し」に支えられて半ば強引に推進されたのである。そこに示された大義名分は「活性化」であった。「伝統と創生」は、その言葉の真の意味を連続させたところで京都を描くことに「1200年」の節目において成功していない。

京都に表れた景観問題は、実は京都といった社会のあり方に深く関わる問題である。人間にとって都市は、二つの環境を準備する。一つは建築環境として、もう一つは社会環境としてである。実態としての都市は、二つの環境を重ね合わせたところで存在している。ところで、例えば私たちは自然界のエネルギーとしての重力を、リンゴが落ちることを通して経験するが、重力そのものを見ることはできない。社会も同様のことがいえよう。人間と人間の交流のうえに築かれた共同的集合体としての社会は、直接には見えてこない。しかし存在している。こうした共同的集合体のあり方を都市として見る。しかしそれは、何よりもまず都市の建築を通して見ている。景観問題は、この建築環境の揺らぎであり、その揺らぎは建築やその連年の背後に隠された社会的エネルギー、社会関係の表現なのである。

京都らしさの社会システム

景観問題が建築環境の揺らぎであり、それは社会環境の反映されたものであるなら、さらに都市環境としての社会の分析に進まなければならない。社会は4つの機能に分解できる。それらは、財の生産に関わる機能（経済）、手段選択に関わる機能（政治）、市民的合意の形成に関わる機能（自治）、価値の実現に関わる機能（文化）である。景観問題は、これら4つの機能を通して見れば、脱製造業化、サービス化など新たな経済の問題、政治的決定手続きの問題、市民的な討議と支持の問題、京都らしさといった価値の継承の問題といったように捉えかえすことができる。「揺らぎ」は、このように社会システムの機能の問題に置き換えて読み取ることができるのである。では京都的なシステムとして、京都を京都たらしめてきたものとはいったい何であろうか。その点について検討してみよう。

京都の歴史は、改めて触れるまでもなく都としての歴史であり、都は御所をシンボルとした。そこから発せられる価値は、端正と洗練といった形に表れて衣食住のものづくりの世界に染みわたり、歴史の中で社会システムを作り上げ、成熟させた。御所を取り巻くようにして発達したものづくりのまち京都、それは織物の西陣、染めの室町、陶器の清水、酒の伏見などによって形づくられている。さらに祇園は、京都の中であって京都的もてなしの場である。そこは、いわば京都のショーウィンドウであ

る。そこに存在する都市のしつらえ、例えば建物、庭、部屋のたたずまい、料理、食器、芸者の着物、そして作法などは、今日なお生きている洗練された秩序であった。

ではこれらは前近代的で、したがってその意味で遅れたものであろうか。近代日本の資本主義の発達にとって、意義は持ち得なかったのであろうか。近代日本の資本主義の発達は、近代以前の伝統的社会の中に、洗練された文化と端正な前期市民的な社会が内包されていて可能になったことではないか。京都の伝統的な地域での生活様式は、こうした分析視角に対して示唆的である⁵⁾。だが、近代資本主義の発達は、前期市民的な社会を基礎としつつ同時にそれを解体させるといった矛盾をはらんでいる。日本の経済的成功は、大量生産システムを担う巨大な近代産業へ人びとが吸引されることによって引き起こされた、多品種少量生産システムを担ってきた地方的な伝統産業の解体と引き替えであったのである。

京都が、新たな100年を計画しうる誇りとアイデンティティを自己の中に確認することができかどうかは、実は日本の誇りとアイデンティティに関することなのである。それは、都市の成長といった悪夢から解き放たれ、成熟した都市としての自信を私たちが取り戻すことである。都市にもう一度、豊かな暮らしの場を取り戻すことに他ならない。このような都市の復活を可能にする道筋の解明こそ焦眉の課題であろう。

活性化の意味するところ

京都の都市イメージは、和風文化と分かちがたく結びついている。大阪や神戸と比較してみると、京都の都市の性格がいっそう浮きあがってこよう。都市にはそれぞれの歴史的な成り立ちがあり、この歴史的な成り立ちと現在のそれぞれの都市のあり方は不可分である。大阪は商都であり、神戸は開港都市である。

京都の再開発の手法についての論争は京都タワー建設に示されたように戦後、日本の高度経済成長期からすでに始まっている。だが、この数年特に論争が大きく戦わされてきたのは、京都が都市として誕生して1200年の歴史的節目を迎える1994年にあわせて、再開発の力が大きく作用したことによっている。京都ホテルと京都駅ビルの建て替え問題はその典型である。「北部保存・南部開発」といったラフなグランド・デザインが提起されながら、その北部の中心地と見られるような場所で開発許可された京都ホテルと、京都のいわば表玄関である JR 京都駅の駅ビルが巨大なビルへと立て替えられることの意味は重い。いづれも行政の決定によるが、何が京都の未来にふさわ

5) 高田公理「座談会 危機の象徴 建都1200年」『京都 TOMORROW』Vol. 2-No. 11, 1994年6月。

しい「京都のホテル」なのかそして「京都の駅ビル」なのか、といった市民的討議と合意を得ないままに事業が開始されている⁶⁾。こうした過程で最も問題となったのが高さである。京都は建物の高さ制限は31メートルに規制されているが、経済界に対する「特別な政治的計らい」によって両方の建物は60メートルの高さに認められた。それは、京都を経済的に「活性化」させるものであるといった政治的スローガンを背景にしている。京都駅の巨大な四角いビルの中は、デパートとホテルによってその大部分が占められるというが、はたして京都の歴史の文脈に即して、京都にふさわしい物語を持ち得ることになるのだろうか。これら2つのビルの建て替えは、市民に京都の未来のあり方を突き付けることになった。

元来、日本の都市は、自然との連続性を基礎に成り立っており、自然を拒絶したところで成り立つ西欧の都市と趣を異にしている⁷⁾。文化的秩序によって一元的に支配されるヨーロッパの都市に対して、自然と文化といった二元的な秩序支配を受ける日本の都市風景を目のあたりにして、西欧からの来訪者たちは奇異な感情を隠さない。魅了されながらも外見的無秩序をしばしば非難する。しかしながら、京都の都市再開発問題は、日本の都市が歴史的（文化的）な連続性だけでなく、自然との調和で成り立っているということを改めてクローズアップしていることを指摘しておかなければならない。京都を取り囲む山々と中心を流れる川は京都を育んだ容器なのである。山々の四季の変化はもちろんのこと、例えば、8月に行なわれる先祖供養のための仏教行事「五山の送り火」を眺めることができる風景は、市民的財産と考えられてきた。都市のスカイラインを崩す高層建築物は、京都の自然と文化の織り成す秩序を乱す存在であったのである。

なるほど京都の経済を担ってきた伝統産業は力を弱めている。しかし、そうした時代の流れの中であってそれらの占める割合はなお高い⁸⁾。伝統的織物産地・西陣は日本で最もふい歴史と伝統をもっているが、なお日本で最大の産地としての役割を担っている。京都において、1990年代に入ってから後にも全製造業の事業所のうち約4割、従業者において2割、出荷額では1割が繊維産業で占められている。そのうち和装製品は出荷額において約3分の2が西陣で生産されている。京都を京都たらしめてきた産業の有り様は、歴史の奥行の深さをみせつける都市の社会システムなのである。

6) 「特集・京都の景観問題Ⅱ」『建築ジャーナル』1991年7月号、企業組合建築ジャーナル。

7) ベルク、オギュスタン「東京の風景における秩序と無秩序」都市研究懇話会・篠塚昭次・宮本憲一。早川和男、イエキス編『都市の風景』三省堂、1987年、6頁。

8) 京都市経済局『京都市繊維産業ビジョン』1991年。

2. 歴史的な都市の構造

都市のもののづくりと町人自治

京都の経済はこんにちまで、伝統的な産業によって担われてきた部分が多い。それら伝統的な産業は、織物や料理や建物など伝統的な生活に関わるものである。御所を取り巻くようにして形成されたこれらの職人産業から産み出されたものは、御所を背景にして洗練された、質の高い日本的なものといった商品価値が与えられて流通してきた。このような京都の都市のシステムは、日本の歴史の中でどのように形成されたのか。

京都の商工業の発達は、室町時代（14～15世紀）に王朝貴族の都市から商人や手工業者でにぎわう中世都市に変貌をとげていくなかで促される。絹織物をはじめとして商工業者による各種の同業者組織・座が広まり、見世棚といったようなこんにちの店舗につながる商いもあらわれ、流通の拡大とともに富裕な町人層の登場を促す。しかし、応仁・文明の乱（1467～1477年）は、商工業でにぎわいをみせた京都の町を灰燼に帰してしまう。たび重ねて繰り返された市街戦のうえに足軽など下級兵士の掠奪など暴力が戦禍をいっそう大きくした。

応仁・文明の乱のあと無法と化した京都で、町人によって自衛のために街路を挟んで両側から町（ちょう）が形成される。この京都の町は日本で最も古く、現代の市民的自治組織である町内会の起源であるとされている。町は、やがて戦国時代（15世紀末～16世紀中期）を経て町組へと発展して、こんにちの学区（小学校区）の基礎につながっていく。私がここで取り上げる織物の町西陣は、町人自治の原型に歴史の中で折り重なっている。

室町時代に発達した町人自治組織は、破壊と体制への組み込みによって織田・豊臣政権下で大きく後退する。交替した江戸幕府権力（1603年～1867年）もまたこうした織田・豊臣によってとられた支配のあり方を受け継ぐ。したがって、近世京都を物を作ったり商ったりする町人の都市と言ってしまえば、当然、異論が出されよう。しかし、政治都市江戸（東京）とは異なって、江戸幕府（武士）権力の正当性を裏打ちする御所（天皇）の権威は、京都の地にあって、逆に都市産業を育む要因になっている。地方の封建領主が競うようにして武家屋敷を洛中に求めているが、それは禁裏による叙位や典礼のためや、学問、文化を吸収するためだけにではなかった。織物、染物、陶磁器、漆器、金工細工など、ここで生産される質の高い手工業製品を購入するためでもあったのである。

こうした物品の生産は、商品経済の発達とともに、西陣をはじめ各種の同業者町を自生的に発達させ、富裕な町人の経済力を蓄積させる。それは、かれらによる町組の自治をいっそう強めていく。町では、触の伝達から治安、消防、家屋敷の売買・貸借の手續、訴訟手續、戸籍事務、相続の公証など、これらに関わる町財政の負担まで含めて公共的業務がきわめて多岐にわたって遂行されている。しかし、江戸幕府は町人の力が強くなっていくことを決して快くは思っていなかった。

もともと京都は江戸（東京）や大坂と異なっており、一級上位の所司代によって治められていたが、やがて他の都市と同様に町奉行に移され、支配が強化される。こうした干渉による軋轢は、文化14年（1817年）の町組による一大訴訟事件「町代改儀一件」を引き起こすまでに発展し、京都をはば中心の二条通りを境にして、上京・下京に南北二分した町組の自治連合組織「大仲」の結成にまで至らしめている。この事件は、町代がもともと町によって雇われた者であったにもかかわらず、奉行の側に立った振る舞いが目立つようになったことから町が裁判に訴えたもので、町側の言い分が認められる。町の公共的業務の制度化は、町が家業経営者の地縁的集団としての性格を強めていく過程でもあった。しかしながらその過程で、矛盾もまた孕まざるをえない。拡大する公共的業務の家持層による負担は、費用および組織に限界があった。幕末期の混乱のなか、町・町組を抱え込んだ支配の合理化は、明治維新の近代政治改革とともに、京都府政に引き継がれていく。

西陣の暮らしと町

伝統的な絹織物を生産してきた西陣は、京都の特徴をもった代表的な町である。この町には世帯数3万6千、人口約10万人の人びとが生活し、約3500の繊維工場があり、そこに12000人の従業者が暮らしてきた、職住一体の町である。しかし、「バブル」をはさんで「空洞化」が急速に進んでいるのである。このような伝統的な産業が都市の中心部にあり、歴史的な都市景観を形成してきたことの意義は大きい。

西陣の織物生産システムは、社会的分業によって成り立ち、その原型はすでに徳川後期には形成していたことが明らかにされている。17世紀終わりから18世紀初頭にかけて西陣160余町、天明・寛政期（1780年代から90年代）に織屋数2120軒（休業約400軒）、織機台数2580台、天保期（1830年代から40年代）に織屋数2118軒（休業318軒）、織機台数3164台と記録されている。織屋一軒につき織機1.5台から1.8台である⁹⁾。これ

9) 安岡重明「西陣の盛衰」京都市『京都の歴史』、学芸書林、1973年、238-239頁。

らは、高機八組と呼ばれる織屋で、いわば西陣の中心的な存在であった。それぞれの組の間には縹子、錦、金襴、縹珍など織物製品に専門とする取り決めがなされていて、織屋仲間同志で分業が成り立っていた。しかし、これら高機八組以外にも多くの織屋の仲間立ちが行なわれていた。また織物製品の専門分化とともに、さらに生産工程のうえでも、練屋、染屋、紋屋、箴屋などの下職と呼ばれる専門分化が進んだ。明治6年(1873年)にフランスからジャカードが輸入されると、機械工程から規定された紋彫、紋編などの分業化がいつそう進み、こんにちの西陣織生産の複雑な分業システムが築かれたのである。

西陣を中心的なところから担ってきた、織屋と呼ばれる機織業には三つの形態がある。自己工場のみで生産を行なっている織屋、出機(賃機)のみで生産を行なっている織屋、自己工場と出機を併用して生産を行なっている織屋である。生産工程は、織屋による製織工程の前後に、原料準備工程(撚糸、糸染など)、企画・製紋工程(意匠、図案、紋紙など)、機準備工程(整経、綜統など)、そして仕上工程(整理、加工など)があり、それらの工程は関連業種として、地域内の独立した専門業者によって担われてきた。西陣織は、関連工程が織屋からそれぞれに独立することによってまた、自らの手工芸的技術をよりいつそう高めてきた。その結果、西陣はあたかもそこが一つの工場であるかのような有機的な地域社会を発達させてきたのである。このような生産構造は、地域の社会関係に色濃く投射される。

和装織物業といったものづくりの経済は、それが有している特性によって地域の社会関係を形づくる。西陣の着物や帯は多品種少量生産であり、それほど規模の大きくない織屋同士が互いにメーカーとして横並びにフラットな社会関係を形成する。この点は町の成り立ちを理解していくうえで最も重要な点である。自動車や電気製品など少品種大量生産の巨大産業を抱える都市、企業城下町とは多いに異なっている。西陣の町は、数多くの小さな織屋がそれぞれに先染の紋織物の共通した技術的と意匠的背景「西陣織ブランド」のもとに、着物や帯等多品種を少量に生産して競いあってきた。

生産の仕組みにおいては、織屋が製織工程の前後を高度な技術が必要とされる各種の独立した専門業者によって支えられている、といった社会関係がある。より専門化した分業は、表面的には相互依存的で有機的な社会関係を形成する。しかしながら、「お互いに持ちつ持たれつ」といった表面的な関係も、その分業は、織屋の下職であり従属的な社会関係になっている。手を休めればそれだけ収入が減るといった下請けによる出来高制であり、不景気の時には安全弁の役割を果たす厳しい関係になっている。

このような経済生産のあり方は、職住一体となって「オモテとロージ」といった町並みを形成して、共同消費的な町内の生活にも影響を与える。あたかも「ムラ」のような家族的で気心の知れた関係を形成する。しかしながら、この「オモテとロージ」の関係は差別的であり、主従のはっきりとした関係なのであった。着物や帯にいつそう「西陣らしいもったい」を与えるオモテに面した織屋のりっぱな構えがあり、他方に「糸道弟子奉公」で親方の家への住み込みや、賃機のロージの借家長屋がある。そして町内は、オモテの織屋によって支配されたことはいうまでもないし、労働力管理の役割を担っていたのである。これらは西陣の生産のあり方から階層的に規定された町並みのたたずまいである。このようなフィジカルな構造を媒介にして、人びとの近隣での社会的位置もまた規定され、地域の社会関係が補強されてきた¹⁰⁾。

空洞化する伝統産業

西陣は1970年代に入ると、「生産地の空洞化」といった事態が顕在化しはじめる。そしてじわじわと深刻さを増していく。西陣の歴史的推移と空間的広がりの中で、その問題をおさえておこう。

西陣にはまず、俗に「ほんまの西陣」と呼ばれる西陣織発祥の地で、最も古くから西陣織を営んできた、織元の比較的多かった区域がある。これは歴史的西陣と名づけてよい。つぎにその区域を囲むようにして、西陣織生産が拡大される過程で発達した、賃機や関連業種の多い区域がある。現在、西陣と考えられている区域で、これが第二の西陣である。社会的分業の発達したという意味で、社会的西陣と呼べるものである。ところがこんにち、着物需要の低迷のなかで内機の出機化、出機の地区外化が進み、その出先は丹後を主力地として韓国や中国にまでに及んでいる。丹後はあくまで丹後で西陣ではないにもかかわらず、西陣織を生産しているといった関わりにおいて西陣である。これが第三の経済的西陣である。西陣が経済的西陣として生き残っていかうとすることで社会的西陣の衰退を呼び起こし、この事態のなかで歴史的西陣の意義をあぶりだしている。これが今、西陣の直面している危機の構図である。

西陣は、高度成長期を境に徐々に衰退の兆しを見せはじめていた。昭和41年、主力生産品目の着尺が帯地へと転換した。40年代を通じて、織機台数の伸びは示したものの企業数は減少し、階層分解が進んだ。さらにオイル・ショックを経て50年代にはいると企業数、織機台数、従業者数のいずれも減少化傾向を強めた。そのなかで示され

10) 拙稿「オモテ・ロージの町内構造の崩壊からまちづくりへー京都市西陣の事例」岩崎信彦他編『町内会の研究』御茶の水書房、1989年。

た西陣の対応は、より付加価値の高い生産品目への生産集中と、出機化によって労働市場を丹後などの地区外に求めたことであった。

西陣がこのような困難に直面しなければならないのはなぜか。まず最初に考えられることは、何よりも生活様式の変化によって伝統産業にたいする需要が減退したことである。伝統産業は衣食住に直接結びついた多品種少量生産によるものが多く、生活様式が洋風化したことは需要減退の決定的な要因となった。需要減退といった事態への距離は、伝統産業のあいだで必ずしも一様ではなかったのだが、着物などの和装織物は一部の職業をのぞいて普段着として着られなくなったし、その点で需要の変化というよりむしろ消滅といったほうがふさわしいと思えるほどの事態であった。

このような事態は、伝統的な生産のしくみそのものをも問うことになる。西陣では生産の拡大と技術の高度化とともに地域内分業を発達させてきた。先にもふれたように、製織は零細な織元がいっそう零細な賃機業者を利用することによって成り立ち、製織工程の前後の各工程はそれぞれに特化され、独立した関連業者によって担われた。これは和装織物業が流行に左右されやすく、需要の変化に容易に対応できるようにした生産組織であると言われてきた。このようにシステム化された安全弁は、これまでの時代の変化のなかでは有効であった。しかし、結果的には時代への適応を遅らせることになった。こんにちのような世代交代をともなった、需要構造の根底からの変化に対応して、まったく新しい製品を開発したり、技術革新によって価格を抑えるといったようなことに対しては、逆にネックになったのである。西陣では需要の減退を、付加価値の高い製品を労働力の安い地区外での生産によってしのごうとした。戦後流行った大衆品であるウール地の着尺から絹の帯地へといった高級化、着物の脱大衆化と、丹後への出機といった、結果として自分の首を自分で絞めるような道を選んだのである。今や織機の7割以上が地区外にある。出機化は、関連業種への発注量の減少を生じさせ、社会的分業によって集積した西陣の産地としての存立基盤そのものをもむしばみはじめた。生産機能の流出を追認して、西陣は企画やデザインの町として残っていけばいい、といった考えがある。しかし、西陣で織られた着物や帯が西陣織で、丹後で織られたものは「丹後もの」であった。ところが西陣織の商標をつけた帯のうち7割が、丹後などで織られるような事態になっている。このようなやり方は、商信義に反しないのか。もし反しないとされるなら、西陣織の西陣とはいったい何か、が問われる。町並みに記憶された歴史的なたたずまいと、そのなかに生きてきた職人の、からだに憶え込まれた技術こそ、西陣織を西陣織たらしめたはずである。これらをなくして織りあがった反物が、はたして西陣でありつづけるのか。製造業を上京区や中

京区といった市内の中心部に抱えた京都は、こうしてその成り立ちの根底のところから解体しはじめているのである。

3. 調整様式について

家族・仕事・地域

このような地場産業の後退について、中小企業問題として扱おうとした経済学からの強力な一つの分析視角があった¹¹⁾。そこにおいては、西陣問題は経済の問題であり、戦後日本資本主義の発展過程において蓄積されてきた矛盾の一形態として把握された。それは、「独占資本による地場産業の解体・再編成・包摂」の過程として着目されたのである。すなわち、中小企業問題は、「相対的資本蓄積の不足と相対的人口過剰という二大条件」により形成された「二重構造的特質」との関わりにおいて問題とされ、一方で「資本集中により大企業が成長し」、他方で「相対的人口過剰・低賃金労働力の存立という条件の上に労働集約的産業が存続し、そこに多くの中小企業を擁してきた」とされるものであった。この中小企業論によって西陣問題が解析される。西陣機業はまさに繊維工業の二重構造のなかで、(1) 豊富な労働力、(2) 問屋制支配、(3) 多品種少量生産といった条件のもとに発展した。ところが、高度成長のもとで中小企業も (1) 「大企業のいわば上からの系列化」、(2) 「労働力不足にともなう賃金上昇・労働条件の向上化による労働力補充難」の波をうける。日本の繊維産業において、原料供給部門である化合繊維工業は最先端技術を投入した資本設備を備える巨大企業を形成し、他方で、原料加工部門の繊維工業はその多くを中小の家内工業的生産に依存してきた。繊維工業はさらに高度成長期のあと、二度の石油危機と発展途上国の追い上げへの対応を余儀なくされる。西陣織物業は、こうした影響を受けながら生産種目の質的構成を高めるとともに、地区外への出機が進んだとされたのである。西陣を貫く「資本の論理」があった。

「資本の論理」は、二重構造のもとでのいわば受動的な経済の合理化過程として「生産様式としての西陣」に焦点を向ける。しかしながら職住一体となって社会的分業の発達した西陣では、さらに「仕事の場」と「家族生活の場」を軸心にした暮らし全体の社会的再生産過程を貫く「生活の論理」があり、それが看過されてはならない。人びとはただ押し流されるままに西陣から「離脱」しているわけではない。「職と住」を

11) 同志社大学人文学研究所編『和装織物業の研究』ミネルヴァ書房、1982年。

かかえこんだ能動的な生活者の町としての西陣がある。結果的にみれば、土地と労働力に集約される「資本の論理」からは、生産過程における家族や地域での人びとの関係や生活のあり方といったところまでたどりつけていない。着物のような、多品種少量生産の、手工芸的な伝統による技が欠かせないものづくりにとって、こうした家族や地域での生活のありよう、つまり土地＝場所の意味と労働力＝人の質といったようなものが生産に深いところで結びついている。経済の質が関連業種をも含めた西陣織物業の地域の生活の質とどこか根底的なところで相互に規定しあっている。

経営の「近代化」が推し進められた結果が、こんにちの「空洞化」に他ならない。そしてそのことは、実は「意味のある」共同的な生活の解体なのである。零細な織屋で働く織り手は確かに労働者にちがいない。しかし、トヨタやナショナルなどの巨大な生産工場で働く労働者とは性格を異にしている。トヨタやナショナルの工場で働く労働者は、決して自分の工場など持ち得ない。しかし、織屋に住み込んだ織り手は、高度な技術を習得し、自らの器量如何でロージの賃機屋になり、やがてオモテに店を構える織屋になれる可能性をもっている。つらくて忍耐のいる仕事に耐え得るのはこのためである。一国一城の主になれるのであり、ベルトコンベアーに張りついて働く労働者とは決定的な違いがある。西陣はこのように職人産業によって成り立つ町であり、資本家の企業家と労働者といった枠組みによって捉えるだけでは、家族・仕事・地域を貫く西陣の核心に迫りえないだろう。西陣織生産に関わる仕事が都市としての京都の中で意味ある生活全体に結びつけられながら、労働者の職人的資質といった豊富化された概念から捉えかえしていくことが必要なのである。

失われていく不安の中で意識される文化とその機能

生活の中に溶け込んだ文化は、空気が意識されることのないのと同様に文化として意識されることはない。だからこのような文化は、変化していくことに確信がもてないままに、ただ失われていく不安の中で意識されるものではないだろうか。そこにまた、文化の機能も見出されよう。

京都の町並みをつくりあげた町屋様式は、経営と深く結びついていた。したがって、町屋解体によって引き起こされる景観問題は、実は経済のあり方に関わる問題であり、社会システムの変化として解読されるべきなのである。この社会システムの変化に関わる調整様式は、空間軸と時間軸からさしずめ考えることができよう。空間軸は市民的公共意識の拡大（私的利益と公共的善の媒介）として、また時間軸は京都の枠に規定された近代化（西洋化によらない近代化）として提起できるのではないだろうか。

京都は歴史都市と言われる。かつて都があったからとかあるいは御所や金閣寺など歴史的に名のある建造物が残されているからそう呼ばれるなら、その意味において歴史都市にちがいない。しかしそれだけでは決して本当の意味の歴史都市ではない。なぜなら、歴史的景観が市民生活と結びついているわけではない。市民が自分たちもまた京都の歴史の一コマに生きていることを実感できるような日々を送っているわけでもない。いわば「観光的歴史都市」である。本来、歴史都市とは、歴史の生きている都市、過去との関係を実感として与える文化の生きている都市なのである。

個々の織屋のとった選択的行動は、それぞれに経済的均衡点を求めた行動にちがいない。けれども寄って立つ社会としての西陣から見れば、その解体化に寄与している。今求められることは、個々の選択的行動が西陣の地域社会を豊かにし、その豊かさが個々の選択的行動にプラスに作用していく、このような媒介的調整様式の工夫であろう。京都を個性ある都市として、その個性を織屋建ちによる町並みと産業から醸しだしてきた西陣の衰退は、ただ一つの「京都らしさ」の喪失なのではない。それは京都そのものの崩壊であり、京都の歴史的な時間と都市的な空間の折り重なった社会システムの崩壊へと京都を至らしめるだろう。引き続きプロジェクト研究において、この社会的調整様式のあり方を、「京都の暮らしと町」の中で解明したい。